

令和5年度(2023年度)洗堰上流の瀬田川における チャネルキャットフィッシュの生息状況

石崎大介・山本充孝

1. 目的

近年、県内において特定外来生物チャネルキャットフィッシュの確認数が増加し、瀬田川洗堰上流の瀬田川(以下、瀬田川上流)や琵琶湖南湖においても生息が確認されている。適切な駆除を行い、琵琶湖への拡散を防止して未然に漁業被害を防ぐため、瀬田川上流における生息状況を把握した。

2. 方法

2023年4～10月に瀬田川上流で毎月延縄調査を実施した。幹縄約500mに60本の枝針(ハリス：ナイロン7号、針：ムツ針11号ないし14号)を備えた延縄を5鉢用いて1回の調査で針数300本を設置し、翌日引き上げた。エサは冷凍のアユを用いた。採捕された個体を標準体長400mm未満とそれ以上で、それぞれ幼魚と成魚に分け、調査日ごとに針100本あたりの採捕数を算出しCPUEとした。また2023年5～12月に36回、同水域で実施された滋賀県漁業協同組合連合会が実施した針数300本の延縄による本種の駆除データについても同様にCPUEを算出した。CPUEの月平均を求め、過年の傾向と比較した。またこれらにより採捕された本種の標準体長を4～6月の上期、新たな幼魚が加入する時期である7～11月の下期に分けてヒストグラムを作成し過年の傾向と比較した。

3. 結果

4月と5月に幼魚が1個体ずつ採捕され、これらはいずれも体長350mm以上の大型の幼魚であり瀬田川洗堰の全開放流以前であったことから、2022年以前より瀬田川上流水域に生息していた個体と考えられる(図1)。

6月には幼魚の採捕はなかったが、7月以降の幼魚のCPUEは上昇した(図2)。それらの個体は体長200mm程度の幼魚が中心であったことから、2022年に瀬田川上流水域で繁殖した個体が成長し、延縄で採捕されるサイズに達したことで採捕されCPUEが上昇したと推察される。一方、成魚は6月の全開放流直後に2個体が採捕された。これらの個体は全開放流で瀬田川下流より遡上してきた可能性もある。これらの傾向は2019年以降2020年を除いて毎年見られており、瀬田川上流では全開放流の際の下流からの成魚の遡上と、その成魚が瀬田川上流で繁殖することによる翌年の幼魚の発生が繰り返されているものと思われる。そのため、駆除事業の継続にあわせ下流からの本種の侵入を防ぐ対策も必要である。

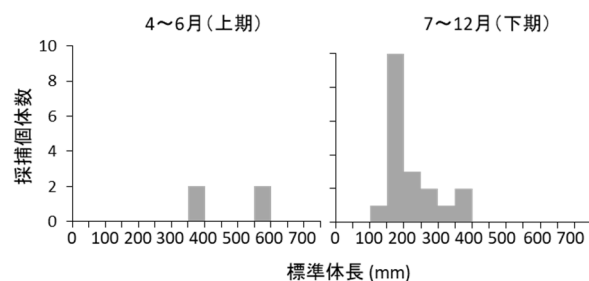


図1 採捕された個体の体長分布

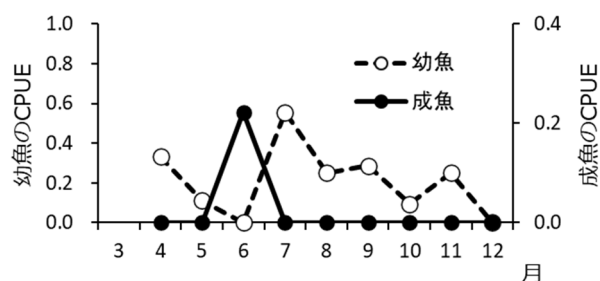


図2 幼魚と成魚の延縄針100本あたりの採捕数(CPUE)の月変化